

# 同窓会便り

発行  
 東北大学・電気・通信・  
 電子・情報同窓会  
 仙台市青葉区荒巻字青葉  
 東北大学工学部電気系学科内  
 発行責任者  
 佐藤利三郎  
 (題字 佐藤利三郎会長)

## 新会長挨拶

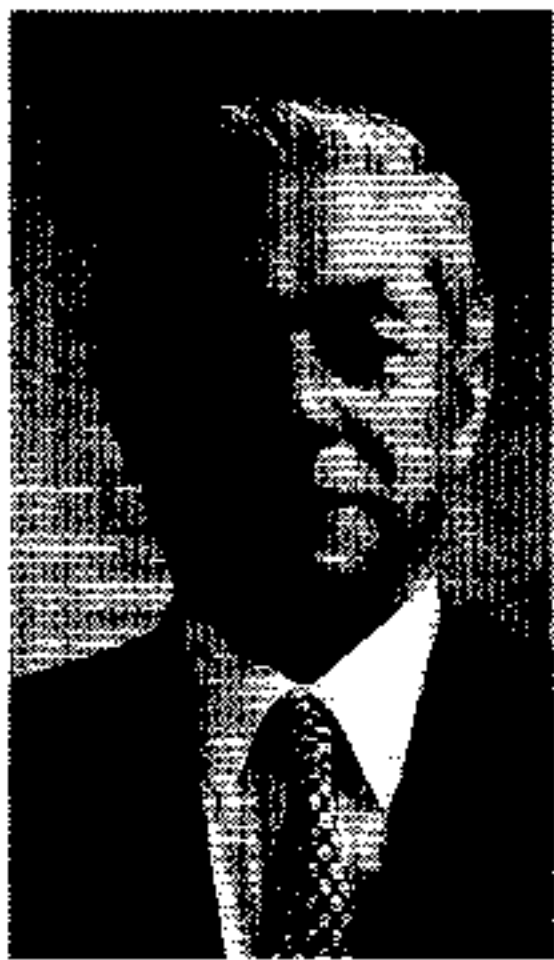
新会長 西澤潤一

栄光の歴史に輝く東北大学電気・通信・電子・情報同窓会の会長を引き継がせていただくこととなりました。甚だ光栄なことであると思ふと同時に、極めて責任の重いのをひしひしと感じております。

申すまでもなく、草創以来、東北大学電気系は、極めて先見性と深い見識に満ちた卓越した展開を実現し、世界を指導するよう立派な業績を挙げて参りました。アルバート・アインシュタイン博士の言葉として、東北大学は将来の最も恐るべき競争相手と伝えられています。電気系は、正にそれを実現した時期もあつたと思ひます。正に中心は仙台に移つていたのです。電子工学発祥の地の一つは仙台であつたのです。

実質的基礎工学部は仙台にはじめて出来たと云ふべきでありましようし、ワイリアム・ショックレイが二十世紀最大の電子工学における業績を挙げた手法と全く軌を一にするものであつた訳です。

来るべき二十一世紀には、これら情報通信



が最大の工業を形成し、最も大きな人類文化に影響を与えることから始まるだろうと考えられます。このような凄まじい世界が、我々の後輩を待っています。しかし、招かれた日本で磁性材料の研究と共に、地震学を創始したのは、田中館愛橋教授によって東大物理に招かれたケルビン卿の高弟ユージン・グッドが、世界ダントツで長年に亘つて地震学の研究をつづけた地震学者は毎日毎日只只楽しく研究をやつていただけだと証言されました。基礎は正確確実な将来へ向けての透視力を持つことではないでしょうか。後輩に対し、そのような強い要求をせねばなりません。その為には、我々自身が卓越した見識を持たねばなりません。身を以て、我等自ら、学識に磨きをかけ、優れた行動を実践することに務めなければならぬと思ひます。

今、金融界に端を発した崩壊は、至るところで、国力を損じつつあります。戦後に始まった創造力の低落は、累積して巨大な欠陥となつてしまつたが、空洞化として漸く把握されたのは、つい先頃のことです。そして今は金融崩壊に眼が眩んで意識されていません。状況は、ますます悪くなつていきます。

創造力の発揮は、東北大学電気系が、特徴として最も大きな成果を挙げて来た分野に他なりません。正に日本は、アジアは、そして世界は東北大学のより大きな活躍と発展を期待していると云つて決して云いすぎではないでしょう。

物質に恵まれない日本の今後は正に人材にかかつています。その養成もまた大学の重要な使命です。教育研究一体を教えて下さったのは八木秀次先生だったと伺つておりますし、基礎応用一体を本多先生に学ばれて、これを更に発展させて我々に臨まれたのも八木秀次先生であります。この優れた学の伝統の下に育てられた我々は正に幸運児でした。そ

## 新しい時代に向けての産官学の連携

新副会長 大槻幹雄



日本経済は未曾有の不況にさらされ、政治・経済・教育はもとより、技術開発のあり方も含め社会全体の新しい仕組みが模索されている。今日の経済危機は五十五年体制の制度疲労であり、新たな二十一世紀に向けての新しい社会の仕組み作りが求められて居ると言えよう。

明治以来の日本の対応は、全ての分野に於いて、欧米諸国に「追いつけ、追い越せ」であつたが、今や、日本は世界の先頭に立つて展開しなければならぬ立場にある。このことは、これまでの「追いつけ、追い越せ」ではなく、技術の分野で言うならば、先端の技術開発が求められていることであり、先端のシステムの新規開発が求められているのである。日本はよく物作りは巧いと言われているが、満ち足りた時代にはどう作るかではなく、何を作るかであり、何を作つたら社会の役に立つかである。「新しい仕組みの物やシステム」を造り出すと言う事は、先ず、世の中の状況を知らなければならぬし、新しいコンセプトも必要だし、勿論、その為の新技術の研究や開発も必要である。端的に言えば、総合技術が求められると言う事である。

例え、経済的クライシスが起つた場合の日本の対応の違いに、第三次産業革命での日本の敗因を見る事が出来よう。即ち、日本の場合は単なる経済循環系の問題としかたづけ、効率化や自動化等に走るが、米国の場合はこのクライシスを新しいコンセプトを作り出す事によって乗り切つて居る。従つて、単に、クライシスを乗り切るのではなく、同時に、次の時代に向けた新しい展開が可能となるのである。

新しいシーズとなる研究・開発は基本であるが、以上述べた様にそれだけでは世界の一流には成れない。今、社会が求めているのは何か、その為の新しいコンセプトはどんなものかを知り、それを肌身で感じなければならぬ。最近、社会人博士コースを新設したり、大学の技術を企業に移転する組織を創設する等の動きがあるが、また、一方では、新しい研究に取り組む教授・助教授の先生方の研究方向が社会の求めている方向に合つて居るのかも極めて大事な事と思う。全く新しいシーズから今まで考えられなかったものが生み出される事は極めて大事であるが、社会全体として求められて居る中でブレックスル技術を生み出す事も大事であろう。ソフトウェアの研究等は全体的に不足して居る様に思えるのもその一例であろう。この点から、八回を経過した「産官学フォーラム」に期待する所が大きいのではなからうか。もっと、生きたフォーラムにならないものであろうか。そして、新しい波は東北から起こしたいものである。

# エレクトロニクス発展のあゆみと同窓会



現会長 佐藤 利三郎

平成十一年を迎え、同窓会員の皆様には益々御健勝のことと御慶び申し上げます。

さて、平成十年に行なわれました恒例の行事を御報告致します。

平成十年二月六日(金)仙台ホテルで第九回産官学フォーラムが開催されました。まず、基調講演岩崎俊一名誉教授の「戦略研究について」があり、ついで「二十一世紀に向けた産学共同のあり方」のテーマで産官学それぞれ立場からの講演討論が行なわれ、続いて恒例の懇親パーティが行なわれました。平成十年三月二十五日(水)東北大学卒業生、午後一時三十分電気情報系一〇一教室で祝賀会並びに同窓会入会の歓迎会が行なわれ、学部卒業生二四九名、大学院修了生四二名の新同窓会員を迎え、当同窓会員は正会員九九四九名、旧現教官の特別会員一二五名、その他会員四名合計一〇〇七八名と一万名を超えました。

平成十年九月十一日(金)午後四時より学士会館において、同窓会本部総会並びに東京支部総会が開催され、母校の近況と行事の報告に続き、榊日本環境認証機構専務取締役福島哲郎氏による「最新環境情報について」の特別講演がありました。地球温暖化防止会議、省エネ法・家電リサイクル法、ダイオキシンなどなど環境への対応は益々重要になって来

ている。これに対する技術者の対応などについて、わかり易く述べられ一同に深い感銘を与えました。支部総会も活発で平成十年三月六日(金)仙台ガーデンパレスで東北支部、平成十年七月二十四日(金)浜松名鉄ホテルで東海支部、平成十年十月二日(金)大阪弥生会館で関西支部がそれぞれ総会が行なわれ盛会でありました。

今年には出版が二件ありました。一つは松前重義先生の御発案で、若き人々に送る書「エレクトロニクス発展のあゆみ」黎明期の東北帝国大学工学部電気工学科、エレクトロニクス発展のあゆみ調査会編、東海大学出版会、一九九八年一月二十日、もう一つは、ANTENNA東北大学電気情報系の歴史、東北大学工学部電気情報系創立七十五周年記念誌出版記念会発行、一九九八年八月二十五日であります。前者は、松前先生の言、今日の変転めまぐるしい現代社会においては、先覚者たちの足跡は次第にその記憶も失われ、忘却の彼方に没しようとしているのではないかと、と危惧の念を抱いている。このような考えから大正初期に始まるエレクトロニクスの幕開けの時代に活躍した諸先輩の業績を整理し、後世に伝えることにより若者を啓蒙し、大学の活性化などに資することが私達に与えられた責務であり、先覚者達の努力に報いる道ではないか、との遺志を継いだものである。

最後に、私は同窓会長として六年間努めました。柴山乾夫、城戸健一両副会長をはじめ役員の方々の御協力によって大過なく過ごすことが出来ました。誠に有難う御座いました。平成十一年四月からは西澤潤一会長、大槻幹雄副会長のもとで進められます。よろしく皆様の御後援を心から御願ひ致します。御挨拶とさせていただきます。有難う御座いました。

# 国立大学の制度改革

澤 田 康 次 (電気通信研究所長)

国立大学は今まで改革の努力があったにもかかわらず社会一般にはあまり評価されてない。その運営方法は旧態依然としていて、教育特に低学年の教育は無責任状態に近い。また、入学試験が小中高の生徒の生活全体を圧迫しているにもかかわらず、大学は比較的に無関心である。大学の進学率が増大した結果学生の志が一般的に低下している。我が国の経済と同じように大学のありかたはこのままではないよりは全般的な見直しを行なうべきではないかという意見がいろいろあるところ議論されている。このようなことは、不思議なことには日本だけではなくて米国内でも同じことがいわれていることが最近のNATURE誌などの記事に見られる。

どのようなシステムでも閉じていけば墮落するのは定理のようなものであり、戦後日本の大学は学問の自由の名のもとに社会と開かれた関係を持たなかったこと、及び大学教官の評価が研究成果に重点が置かれ過ぎて、自分の研究に黙々と打ち込んだりするために、大学全体が如何にあるべきかを真剣に考えるシステムが一般に日本の大学には欠如していたことなどがその原因と考えられる。現在大学制度の改革が叫ばれているのも決して大学内部からのものではない。

しかし、外部からのものにせよ言われてみるともっともな内容が多いという判断ができるようになったのは、日本の社会はその成熟とともに教条主義的思考でなくともやっつけける感じが普通になってきたこと、又、いわゆる民主主義的運営は責任の所在を薄める効果がある半面、現状では時間が掛かり過ぎて教育・研究の時間を著しく削減してとても耐えられないということが分かってきたことによる。

現在、大学の改革は複線的に要求されている。その一つは町村前文部大臣の求めに応じて大学審議会が平成十年十月に報告した答申「二十一世紀の大学像と今後の改革方策につ

いて」によるものであり、もう一つは、橋本前首相提案の行財政改革の一環である公務員削減の線に添った独立行政法人化である。前者の答申の骨子は次の四点である。  
(一)、課題探求能力の育成——教育研究の質の向上  
(二)、教育研究システムの柔構造化——大学の自律性の確保  
(三)、責任ある意志決定と実行——組織運営体制の整備  
(四)、多元的評価システムの確立——大学の個性化と教育研究の不断の改善

これらの項目は誰の目にも当然のことであるがこれほど当然のことを言われる所が残念なところである。現在、全ての大学がこの報告書を受けて具体的な改革案を審議しており、東北大学では、評議会に(一)と(二)を検討する委員会と(三)と(四)を議論する委員会の二つの委員会が六月に発足して現在までに十数回開催され、それぞれの報告書が二月には評議会に提出される予定である。

国立大学の独立行政法人化は十二月に五年間凍結ということに決定されたが、この五年の間に大学の改革がどれくらい進むかによってその凍結が影響を受けることになるであろう。東北大学では部局長会議のなかに独立行政法人化とは一体何かを調査するワーキンググループが発足している。これとは無関係に中央省庁基本法が六月に決定し、平成十一年一月の通常国会において各省庁の新しいやり方に関する法案が決まることになっており、科学技術庁を統合する文部省は科学技術教育省となつてこの組織の一部である国立大学はこの新しい行政改革の波のなかにはいる。独立行政法人化は勿論のこといづれの改革も今後の大学を大きく変えるであろうことは間違いないと思われる。大学が我が国における学術・文化の担い手としての自負と誇りを持ち続けることができるのか、真価が問われる。



# 東北大学未来科学技術

## 共同研究センターの発足

山下 努

(未来科学共同研究センター)

東北大学未来科学技術共同研究センター (New Industry Creation Hatchery Center, 愛称 NICHe) は、新しい技術と産業の創出を図り、社会に貢献していくことを第一の目的とする学内共同利用施設として、四月九日に発足し、その開所式が七月二十七日に学内外の六五〇名を超える方々のご臨席を得て挙行されました。

本センターは、東北大学の開学以来の独創的研究成果による産学連携の実績と特徴とを活用し、産学相互の一層の啓発による新製品



の創製、新技術の開発、新産業の創出を目的としており、国際的なキャンパスインキュベーションを目指しています。

本センターの特色は、リエゾンを行うコーディネーター専任の教授を配置したこと、更に、プロジェクトの研究期間を五年プラスマイナス二年と期間限定しており、終了後は出身部局に戻ることで、目的達成のため専任教授の教育・管理運営の負担が出来るだけ軽減されるよう出身部局の全面的な協力が承けられていることが挙げられます。各プロジェクトの定員は教授のみであり、国内外からの客員教授と企業からの研究員や各種の特別研究員(学術振興会等のポストドクトラルフェロー等)を主力とし、これに学内からの兼務教官(約二〇〇名が参加)を受け入れて研究します。研究費としては通常の校費以外に総て教授が共同研究経費や、提案公募型予算などを獲得して運営します。研究組織としては、開発企画部と開発研究部を置き、八名の専任教授などからなります。開発研究部には九つの研究分野を置き、七分野の開発プロジェクトがスタートしました。

センター長には、工学研究科長の四ツ柳隆夫教授が併任で就任しました。研究企画部にはこのセンターの情報中核であり、その構成は、専任教授 井口泰孝先生(工学研究科協力講座未来産業創造工学分野)と兼務教官教授 西澤昭夫先生(経済学部)です。また、研究開発部の各分野は下記の通りです。

- ① 未来新素材創製 教授 井上明久 「鉄族系高機能バルク金属のガラスの創製と工業化」
- ② 未来デバイス創製 教授 山下 努 「超伝導単結晶による省電力高速デバイス」

- ③ 未来情報社会創製 教授 大見忠弘 「知的機能を備えた電子システムの創出」
- ④ 未来エネルギー創製 教授 江刺正喜 「省エネルギー・省資源のための小形・集積化技術」
- ⑤ 未来都市創製 教授 山田大彦 「災害環境の予測と制御」
- ⑥ 未来材料システム創製 教授 石田清仁 「金属ダイナミックス」
- ⑦ 未来環境創製 教授 内田 勇 「未来環境創製のためのエネルギー交換・貯蔵プロセスの研究」

大学の外部には特許等の評価・出願・接待、大学や研究者への利益還元、投資資金の取扱を行う TLO (Technology Licensing Organization) なる技術移転機関および投資事業組合の二つの組織を設立する予定です。これらの組織とセンターの研究企画部門との協力により、新産業の創出に基づく大学の研究資産形成に役立つものとなるよう考えています。

\* \* \* \* \*

### 第一回通研国際シンポジウム

「脳の計算原理に基づいた情報処理システムの設計とアーキテクチャ」

電気通信研究所は電気情報系の教授からの提案に基づいて毎年一件又は二件の「通研国際シンポジウム」を開催している。この経費は文部省に申請するが、全国共同利用研究所にはこの申請に対してこれまでの例では毎年四百万程度の補助が出ている。平成八年度の山下教授提案の超伝導関係に続いて平成九年度は我々が提案した「脳の計算原理に基づいた情報処理システムの設計とアーキテクチャ (Design and Architecture of Information Processing Systems Based on The Brain Information Principles)」を平成十年三月十六

日から三日間メルバルクで開催した。主として脳の生理学的研究分野と脳型計算機のアーキテクチャ及びその集積化の研究分野の研究者外国人十八人を含む約一四六人が集まりホットな議論を三日間続けた。内容は次の四部に大別される。感覚器の基礎解析について、「感覚器におけるノイズの役割」(Collins: ポストン大学、佐藤: 大阪大学)、「大脳皮質の神経細胞の同期発火のメカニズム」(Aertsen: アルバート・ルートビヒ大学)「脳シグナルの独立成分解析」(甘利: 理研)、「統計システム、過去、現在、未来」(Garda: ビエール・マリキーリ大学)。

視覚・嗅覚の機構について、「視覚情報処理とハードウェア」(白井: 豊橋技術科大、Inverdi: チューリッヒ神経情報研究所、八木: 九工大、久間: 三菱電機、Grati: AT&T)、「嗅覚情報処理」(Geldner: Bell Lab、関口: 三洋電気)「モデルマッチングと認識」(Wutz: ルール大学)。

脳のコーディングについて、「脳の情報コーディング」(桜井: 京大霊長類研)、「視覚情報の神経コーディング」(三上、京大霊長類研)。

脳モデルについて、「ラットの海馬モデル」(Burgess: ロンドン大学)「歩行パターン」の自己創出」(矢野、東北大)「短期記憶のモデル」(二見、東北大)、「睡眠状態の遷移とダイナミックス」(山本、東北大)、「脳における主体性・創造性」(澤田、東北大)。

モデルの集積化について、「量子化結合神経回路の集積化」(中島: 東北大)「パルス可学習神経回路」(Garda: エジンバラ大学)等二十三件の招待講演とその他四一件の論文が発表された。

脳そのものの生理学的研究、脳型情報処理システムのアーキテクチャの研究及びそのハードウェア化までの幅広い研究分野を複数のセッションに分けることなく、セッションで三日行なったために議論が異なる専門分野の間で行なわれ、他の会議には見られない特徴が好評であった。又院生等若い研究者の発表が多く、この分野の将来は明るいということを実感した。

# 平成十年度同窓会総会報告

# 平成十年度同窓会総会講演会要約

平成十年度の同窓会総会は、例年のように、東京支部総会との合同で、平成十年九月十一日午後四時から六時三十分、東京神田の学士会本館二〇二号室において開催された。

近藤英雄(三洋電機)東京支部幹事補佐が開会を宣言し、始めに佐藤利三郎同窓会長、

続いて吉田章(三洋電機)東京支部長が挨拶を行った。佐藤会長は、同窓会の現況および活動の概略を紹介すると共に、渡辺寧先生生誕百年記念パティ、七十五周年記念出版「アンテナ」および「エレクトロニクス発展の歩み」の発行を紹介した。また、吉田支部長は、東京支部が開催した総会、産官学フォーラム、および企業間ネットワーク交流会の状況を紹介し、今後の方策についての見解を述べた。

引き続いて、大学の近況について、樋口龍雄電気・情報系運営委員長および澤田康次電気通信研究所長から、国立大学のあり方に関する最近の状況、新しく設置された未来科学技術共同研究センター、電気・情報系七十五周年記念誌「アンテナ」の出版、電気通信研究所の近況などの紹介がなされた。議事においては、平成九年度の事業ならびに会計報告、平成十年度の事業ならびに予算案が承認された。次いで、平成十一年度の役員が選出された。その結果、西澤潤一(昭二十三)新会長、大槻幹雄(昭二十九)新副会長が選ばれ、また総務幹事に佐藤徳芳(昭三十五)教授、庶務幹事に中村慶久(昭三十八)教授、会計幹事に水野皓司(昭三十八)教授、会報幹事に阿部健一(昭三十九)教授が、それぞれ選出された。

次いで、東京支部総会に移り、平成九年度の事業ならびに会計報告、平成十年度の事業ならびに予算案が承認された。また、平成十一年度の支部役員として、支部長に内田善之

(昭三十七、富士電機)氏、副支部長に奥原弘夫(昭三十八、東芝)氏、幹事に大沼崇(昭四十八、シーメンスコンポーネンツ)氏、副幹事に東海林和弘(昭四十六、東芝)氏を選出した。

引き続き、例年どおり特別講演が行われた。講師は日本環境認証機構専務取締役の福島哲朗氏で、演題は「最新環境情報について」であった。日本環境認証機構(JACO)およびISO14001の紹介の後、京都会議、省エネ法・家電リサイクル法、ダイオキシンと環境ホルモン、悲観的金属と楽観的金属、そして企業活動への影響について述べ、極めて有意義な講演内容であった。

総会終了後、学士会館二一〇号室において盛大な懇親会が催された。参加者は約百人で、昨年より十数人少なかった。大沼東京支部副幹事の司会で進行し、物故者への黙祷の後、吉田東京支部長が開会挨拶を行った。授章者紹介の後、佐藤同窓会長の挨拶があり、引き続き、平成十一年度からの会長、副会長に選出された西澤潤一先生、大槻幹雄氏からの挨拶、同窓生を代表して藤木栄(昭和十五)氏の挨拶があった。城戸副会長の乾杯の後、懇談に移り、和やかなひとときを過ごし、例年のように、若干会員の首頭による万歳三唱で閉会となった。

平成十一年度総会・懇親会が、より多くの参加を得て、さらに盛大になるよう、会員諸兄の協力を願う次第である。

最後に、本会開催に対する東京支部役員の皆様御尽力に感謝する次第である。

(佐藤(徳)記)

講師：榑 日本環境認証機構  
専務取締役 福島哲朗氏  
演題：「最新環境情報について」  
概要：

① JACOは一九九四年に七名で設立され、現在一〇名になっている。そのうち東北

出身者は七名である。日本のISO一四〇〇一の審査登録数は一〇〇〇件を超えており、世界全体の二〇%を占めている。ISO九〇〇〇の場合、全世界で二十四万件に対して国内は六五〇〇件(二%)に過ぎず、ISO一四〇〇一に関する日本での関心は高い。業種別に見ると、電気機械、一般機械、精密機械などの輸出産業と化学工業で七十五%を占めており、一部の地方自治体でも導入が検討されている。

② 昨年地球温暖化防止会議が京都で開かれた。先進各国の温暖化物質排出量は、二〇一〇年に於て、一九九〇年の一五・二%にする事が決まった。日本は一六%であるが一九九六年の時点で既に一〇%となっているので、一十五%以上引き下げなければならない。内容は非常に厳しい。排出量は総量規制なので、排出権取引が認められた。これは、排出量が規定値に達しなかった国から排出権を買い取る制度である。

③ 省エネ法は、九九年四月から施行される。トップランナー方式が導入される為、メーカーは製品をコストと品質という二つの視点に加え、エネルギー消費量という視点を加えなければならない。トップランナー方式では、各製品のエネルギー消費量が数値として明らかにされるが、その数値の妥当性(公平性や透明性)をどう保証するかが課題となっている。家電リサイクル法は二〇〇一年に施行される。家電製品の再資源

化が目的だが、メーカー側としては、回収ルートを検討やリサイクル拠点をどう配置するか等が課題となる。

④ ダイオキシンには青酸カリの千倍の毒性があり、発癌性も明らかとなっている。人間の許容摂取量は体重一kgに対して一〜四ngである。また、体内の脂肪に蓄積される性質があり、母乳を通しての乳幼児への影響が心配されている。環境中のダイオキシン濃度について日本では調査が殆ど行われていない。現状の国の基準は八〇ng以下となっており、他の先進国の〇・一ng以下に比べると見劣りがする。

⑤ 採掘される資源の品位と量によって、悲観的の金属と楽観的の金属に分類できる。楽観的の金属の場合、採掘していくに従って品位はそれなりに低下するが、採掘量がカバーしてなんとか資源として使える。一方、悲観的の金属の場合は、採掘していくに従って品位が急激に劣化し、採掘量を増やしても資源となりにえない。悲観的の金属には、銅や鉛が含まれており、電子産業への影響が大きい。MITの試算では、工業生産は二〇一〇年にピークを迎え、例えば採掘資源が今の二倍と仮定しても二〇三〇年にはピークを迎える。環境問題は、まさに、我々の子供達の世代の問題である。

⑥ 環境への対応は企業活動に対してコスト上昇を強いるだけなのだと思っ取ってはいけない。例えば、悲観的の金属の代替として楽観的の金属を使うことができれば、それはビジネスチャンスにもなりうる。今まで企業は、利益の一部を研究開発や設備投資に振り向けて存続してきた。今後は環境に対しても投資しながら存続すべきである。

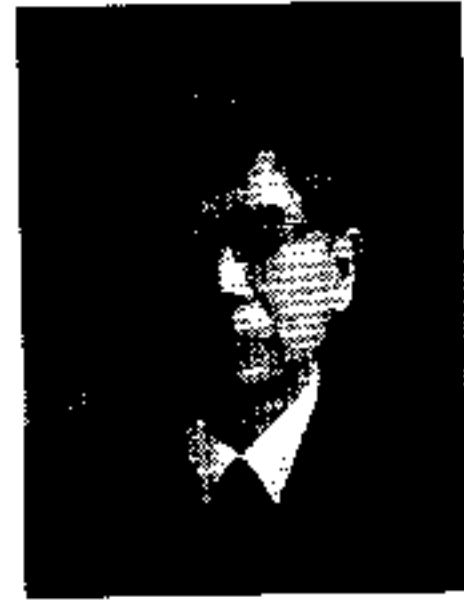
東京支部幹事 小林明夫



# 近況報告

北陸先端科学技術大学院大学

木村 正行



私は平成三年三月に東北大学を定年退職し、同年四月に北陸の地(石川県辰口町)に開設予定の新構想大

学に赴任しました。北東に白山(二千七百メートル)、西に日本海を望む大学建設予定地の丘陵地帯の一角に立って、飯島泰蔵先生と記念写真を撮ったのが、遠い昔のことのように思われます。多少の試行錯誤を繰り返しつつも慶伊富長学長の卓越した指導力と強固な信念のもとに、新大学の創設期をまっしぐらに駆け抜け、その余勢を駆って新たな学問領域の開拓を志向する知識科学研究科を新設(平成九年四月)した、というのが今の私の実感です。

私は平成十年三月末の任期満了で一度退職しましたが、諸般の事情(知識科学研究科の立ち上げ等)で同年五月に再び副学長の職に就きました。退職までの七年間は、大学の研究棟や施設が次々に建設される中で、教育研究の立ち上げ、管理運営の変遷、大学を囲むサイエンスパークの造成等の環境変化など、劇的な変化の連続でした。私は、大学創設期の様々な変化を興味深く体験し、また思い出に残る次のような研究ができて大変幸せに思っています。

それは、私が東北大を退職する前年(平成二年)の情報処理学会全国大会の招待講演(自然知能と人工知能)の原稿を書いている時に気付いた疑問「遺伝コードは何故そのような

構造を持つのか？」を解決した研究です。この問題に関しては、遺伝暗号が解読された直後からアミノ酸の物理化学的性質を基にした様々な仮説が提唱されたのですが、説得力に乏しく依然として未解決だったのです。

吾々の研究では、遺伝コードを確率システム、突然変異を外乱と見做し、遺伝コードは外乱に対してその機能を維持するための二種類の頑健性と進化を可能とするための可変性が要求されるとする新仮説を提案し、それを基にして遺伝コードの構造の規則性について明快な説明を与えると共に、現在までに発見された例外遺伝コードが標準遺伝コードから進化したとすれば、その各々の進化がどのような選択圧の下で起こったかを評価し推論することを可能にし、さらに最も起こり得ると思われる例外遺伝コードの予測をも可能にしました。これらの成果は米国で最も評価が高い科学アカデミーの会報(PNAS)の今年四月号(五〇八八―五〇九三)に掲載されました。

この研究の内容は本学情報科学研究科の第一期生真栄城哲也君(平九年三月修了)の博士学位論文となったものです。私は主に「証明」を分担しました。そして、現在、超高速文字認識の実用化と分子進化遺伝学に興味を持っています。

## 東北大学電気・情報系の歴史 —ANNTEENNA発行さる

電気・情報系が先駆的な研究成果をあげ、人材を輩出してきたことを次の世代に伝えるために、戦後の歴史に焦点をあて、東北大学電気情報系の歴史、ANNTEENNAが発行された。総ページ数三九八頁で、同窓生ばかりでなく、一般の読者にも読み応えのある内容になっている。

申し込み方法

郵便振替 02250-37162 東北大学電気系同窓会本部宛に三、四五〇円/冊をお振り込み下さい。この際、振替用紙の連絡欄に「七十五周年記念誌代」とお書き添え下さい。締切は平成十一年四月末日です。(宮城光信 記)

# 高野知彦先生を偲んで

千葉 一郎 (昭和三十五年博卒)



東北大学名誉教授高野知彦先生は肺炎のため平成十年九月四日逝去されました。享年九十一歳でした。

謹んで哀悼の意を表します。先生は昭和六年三月東北帝国大学工学部電気工学科を卒業後直ちに東北帝国大学副手になられ、変圧器の負荷分担に関する研究を行ない優れた成果をあげ、昭和八年五月には東北大学助手とされました。その後の御研究、熱陰極整流器の新たな点弧法(電学誌昭九年十一月以下八件)は高く評価されており、昭和十年四月二十七歳で名古屋高等工業学校教授に就任され、昭和十九年四月には名古屋工業専門学校電気工学科副科長として同科の管理運営に努められました。

しかし先生の青年時代は戦時で、実に目まぐるしい時代でありました。先生は卒業されて満一年にも満たない昭和七年二月に幹部候補生として電信第一連隊に入営されたのを含め昭和二十年九月に復員されるまで実に四度も兵役に服しておられます。先生は寡黙でその間の苦心については多くを語られませんでした。酷暑下の最前線にありながら長距離電信線に流れる電流と間欠的に襲ってくる猛烈な吹雪との相関を見るため、観測を続けられたお話を私達は今でも思い出すのです。

昭和二十三年先生は仙台にもどられ仙台工業専門学校教授となられ、昭和二十五年

には東北大学教授に就任されました。昭和二十八年四月からは新制大学院と電気通信研究所教授も併任され更に昭和三十六年から工業教員養成所も併任され研究と教育に尽力されました。この間、特筆すべきはけい光灯に起因するノイズの軽減に努力されたことと環境問題のさきがけです。先生は電気学会評議員及び東北支部長、照明学会評議員及び東北支部長など学会運営の枢機に参画し学会の発展に寄与されました。

昭和三十六年財団法人半導体研究振興会の設立に当り先生はその初代理事長として運営の基礎を確立されました。これは先生が半導体電子工業を日本の重要産業に育てなければならぬという卓見の下に行われたものであり、その後の半導体研究振興会の偉大な実績を見ればその御功績が極めて大きいものであることが分ります。そして昭和四十二年五月同振興会の運営の基礎が確立されると自ら理事長を辞し常務理事あるいは相談役として一貫して同振興会の発展に尽力されました。

これらの御功績により昭和五十四年四月先生は勲二等瑞宝章の荣誉に輝かれたのであります。東北大学を定年退職後は名誉教授となられ、また東北学院大学教授として同学を定年退職されるまで一貫して研究と教育に尽力されました。藩政時代から知られる仙台の名家に数学者の長男としてお生まれの先生は本當に温厚篤学、晩年までお酒を愛され弟子達も八幡町のお宅でよくお相伴にあつかったものです。

平成十年九月四日叙正四位。菩提寺は支倉常長も眠る仙台の光明寺です。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

### 豊田淳一先生御退官



十五年間にわたり東北大学工学部において研究と教育にご尽力されました豊田淳一先生が、平成十年三月三十一日をもって本学をご停年で

退官されました。先生は仙台のお生まれですが、ご幼少の頃は中国ハルビンで、青年期は横浜でお過ごしになりました。昭和三十三年三月に横浜国立大学工学部電気工学科を卒業され、同年四月に東京大学大学院数物系研究科電気工学専攻修士課程にご入学されました。昭和三十八年三月に同大学院博士課程を修了された後、ただちに成蹊大学工学部助教授となられ、昭和四十七年四月同大学工学部教授に昇任されました。その間、昭和四十四年九月から一年間、米国テキサス大学電力システム研究所で客員研究員を務められ、昭和四十九年九月から九ヶ月間、同大学電力システム研究所の客員教授として教鞭を取られました。昭和五十八年四月に本学工学部教授にご就任され、電気工学科電力工学講座をご担当されました。平成六年四月からは、工学部の改組に伴い、本学大学院工学研究科電気・通信工学専攻知的通信ネットワーク工学講座をご担当されました。

先生は、大学院生時代から一貫して電力工学・電力システム工学に関するご研究を進められてきました。成蹊大学時代には、世界に先駆けてカルマンフィルタを応用した電力需要予測手法を開発され、国際的に高い評価を得られました。また、電力需要予測理論を連接水系の運用に拡張され、神奈川県相模川水系のダム流入量予測の実用化に貢献されました。本学に赴任されてからは、地元電力会社との協同研究を積極的に推進され、電力ゆらぎの特徴を利用した電力システム安定度監視、地域別電力供給信頼度の評価手法、超電導エネルギー貯蔵の有効利用などの研究を手がけられました。電力ゆらぎによる安定度監視の研究については、平成元年五月に電気学会より電気学術振興賞論文賞を、同年六月には財団法人小平記念会から小平記念賞を受賞されました。この協同研究は現在も継続して行われております。

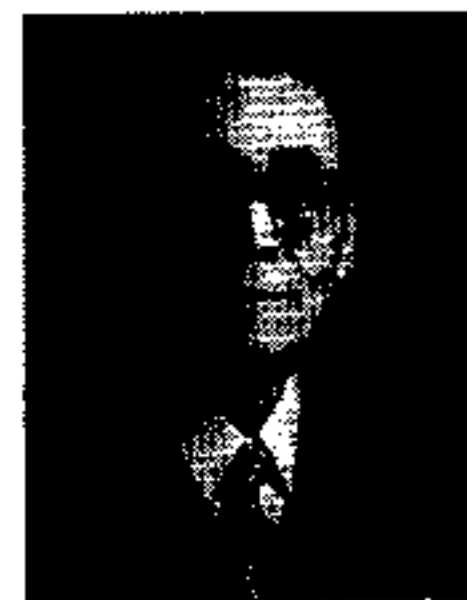
社会・学会活動についても幅広く活躍されており、産業界技術審議会専門委員、日本学術振興会日米科学協力事業審査委員、電気主任技術者資格審査委員会委員(通産省)、学位授与機構審査会専門委員、学術審議会専門委員、日本学術振興会特別研究員等審査会専門委員、東北電気保安協会理事、日本学術会議エネルギー・資源工学研究連絡委員会委員などを歴任されました。国内学会では、電気学会常務理事、電気学会副会長、電気学会電力系統技術委員会委員長などを務められ、その多大な貢献に対して、平成七年五月に電気学会業績賞を授与されました。国際的にも多くの会議の委員を務められ、代表的なものとしては、CIGRE SC39 国内分科会委員長(CIGRE SC39 日本代表)を長期にわたり務められました。先生のこれらのご貢献に対して、平成九年十一月に中国華北電力大学より顧問教授という名誉教授に相当する称号が贈られております。

近年、先生が最もご関心の持たれている研究テーマは、競争環境下における電力システムの未来像を明らかにすることにあります。その一環として、文部省科学研究費補助金の場を借り、若手電力研究者を中心とした研究グループを組織され、その指導的お立場に立たれております。

ご退官後は、八戸工業大学工学部教授にご就任され、引き続き研究と教育にご専念されております。今後も、後進の道標を指し示して頂けるよう、ご指導・ご鞭撻をお願いいたしますと共に、ご健勝とますますのご発展をお祈り申し上げます。

(斎藤浩海記)

### 吉田重知先生を偲んで



本学名誉教授 吉田重知先生は、平成十年四月二十六日ご逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。

水野 皓 司 (昭和三十八年電子卒)

先生は、大正五年に東京都でお生まれになり、昭和十四年東北帝国大学理学部物理学科を卒業され、その後通信省電気試験所および日本電信電話公社電気通信研究所を経て、昭和三十年東北大学科学計測研究所に助教として着任されました。続いて昭和三十五年には東北大学工学部教授に昇任され、電子工学科第四講座(後の電子物理学講座)を担当されました。昭和五十年四月より三年間は東北大学評議員として、また同十一月より二年半東北大学電気通信研究所長として、大学運営の枢機に参画され、東北大学の発展および円滑な運営に大きく寄与されました。その後昭和五十四年三月のご定年まで、研究教育に、また応用物理学会理事、評議員、東北支部長をお勤めになられるなど学会活動にも、多大な功績を残されました。

先生のご業績は、電子工学に関する基礎から応用に至る広い範囲に及ぶ輝かしいものであります。全体を貫くものは先駆的な電子物理学のご研究であります。特に、先生のご退官時の最終講義の題目「二次電子の表と裏」にもなった二次電子に関するご研究は、その基礎物性から応用の電子増倍管まで含む幅広いもので、正しく先生のライフワークと云って良いものであります。二次電子に関するご研究の応用は、今や我々の身近なところで、実用的な電子増倍管あるいは光増幅器として非常に多方面で使われています。

このような先見性のある独創的なご研究とご功績により、先生は昭和六十三年に勲二等瑞宝章を受章されたのであります。先生はまた、心温かい教育者として、学生に深遠なる真理探求の道を示され、現在国際的に活躍している数多くの有能な人材を育てられました。我々が学生時代、先生は夕刻研究室を回られ学生一人一人から報告を聞かれるのが日課でした。今そのことを思い出すと、先生のご努力に対して全く頭の下がる思いです。昭和三十四年に著された教科書の「固体物性論概論(東北大学基礎電子工学入門講座第一巻)」は、当時各大学で新設された始めた電子工学科の学生を対象とした物性論の教科書として、多くの大学で使われました。

先生は、大変謙虚なお人柄で、他人の立場を良く理解される真の人格者として、またそのさりげないユーモアで、多くの人々から慕われました。特にお酒の入った時の先生は、談論風発、まわりの雰囲気を楽しくさせるものを持っておられました。ご退官の数年前には、「不確定性原理で社会の様々な事柄が説明出来るんだよ」とおっしゃって、弟子たちを煙に巻いていたことも懐かしく思い出されます。

先生は、東北大学を停年退官された後も、一層お元気で教科書等を執筆されていらっしやいました。まだまだ、ご指導、またご活躍いただけるものと思っております。またこのように残念・痛恨の極みであります。しかし、先生が築かれた学風と教育に対する情熱は、先生をお慕いする多くの門下生や人々に受け継がれております。

ここに先生のご生前のご活躍とご人格の一端を追慕しつつ、心からご冥福をお祈り申し上げます。



第三十七回通研シンポジウム

「高次臨場感通信を目指して」

通研開催のシンポジウムが国際シンポジウムに軸足を移しつつある中、日本語で開催する通研シンポジウムとして意義のあるテーマとして、臨場感通信の未来を考えるシンポジウムとすることが決定された。

これを受けて、第三十七回通研シンポジウムは、「高次臨場感通信を口指して」と題し、一九九七年十一月四、五、六日の三日間にわたり、ホテルサンルート蔵王において開催された。

澤田康次所長から、本シンポジウムへ寄せられる期待が述べられた後、本シンポジウムの実行委員長である曾根敏夫教授から、本シンポジウムの主旨が、臨場感通信と人間における情報処理の話題を絡めながら説明された。

まず一日目のセッションAでは、臨場感通信技術の現状や問題点が、通研の白鳥教授の講演を皮切りに総合的な立場から論じられた。夕食後のセッションBでは、人間の知覚過程から見た臨場感通信の可能性や現状が発表された。セッションCでは、少量のおつまみとお酒を用意し、リラックスした雰囲気の中で、講演者や他の参加者が深夜まで熱心に討論するとともに、相互に交流を深めた。

二日目のセッションCでは、臨場感通信を行う上で不可欠な技術である情報通信技術や、臨場感のような高次の情報の通信を可能にする高次符号化技術の現状と展望について、また、セッションDでは、臨場感通信を実現する上で、最も重要な知覚モダリティである視覚と聴覚における先端的な研究の成果が提示された。セッションDの後には、懇親会が開かれた。

三日目のセッションEでは、高次の情報を、人間のもつ知覚モダリティに向けて提示する各種ディスプレイについて、新しい概念の提示や、実用化の試みが紹介された。

本シンポジウムには、全国から百名以上が参加し、大学院生や若手研究者の参加も多く、成功裡に終了した。特に、合宿形式で開催したことにより、臨場感通信に興味を持つ様々な分野の研究者が、交流を深めることができたと喜んでいる。本シンポジウムが、高次臨場感通信という「夢」に向けた重要な一歩となったことを確信する。

(曾根・鈴木 記)

電気・情報系、通研のシンボルマーク制定

電気・情報系四学科並びに電気通信研究所のシンボルマークとロゴマークが制定されました。このシンボルマークは、電気・通信・電子・情報に関する学理とその応用研究、並びに将来これを担う研究者、技術者の育成を通して、高度化社会の推進に寄与することを使命とする電気・情報系学科と通研の象徴として、八木・宇田アンテナをモチーフに制定されたものです。また、電気系学科と通研との協力体制の歴史的背景の基に研究、教育の同一性、連続性の重要性を表現しております。このシンボルマーク及びロゴマークの制定に当たられた東北工業大学意匠工学科の山下三郎、八重樫良守両先生には上記意図の表現にご腐心戴いたと伺っております。今後、学会や種々の講演会でこのシンボルマークがお目にとまることがあるかと思っております。同窓の方々にあはせると共に東北大学電気系・通研の一層の発展の為にご支援賜りたくお願い致します。

(横尾 記)



研究室紹介

電気通信研究所川上研究室は、小生(川上彰二郎)が教授、花泉修助教、佐藤尚・大寺康夫・千葉貴史助手、相沢芳三技官ほか、秘書、大学院生、四年学生あわせて二十一人の世帯です。私は一九六五年本学に任用され、当初光ファイバの理論的研究に従事しました。その頃は光ファイバの夜明け前で、研究開始後数年してから東北大型の光ファイバが国内企業から別の名前で華々しく登場し、そのあと二年経ってコーニング社からCorningの低損失ファイバが発表され、一躍ファイバが通信の花形になりました。今は世界中にファイバ網が張り巡らされています。東北大通研からは二乗分布グレーデッドファイバやW型ファイバなど、それぞれ多モードファイバ・単一モードファイバを代表する屈折率分布形状が発明され研究の先鞭をつけています。私たちがその中の一役を果たしました。

電気通信研究所 川上研究室

感想はさておき、現在の研究室では工学分野の人々の話題にようやくのぼりはじめた新技術であるフォトニック結晶の研究に力を入れています。フォトニック結晶は、屈折率の高い透明体と低い透明体をサブミクロン周期の三次元周期構造にしたものです。波長により、偏波により、光を通したり・遮断したり自由自在で、光の直進性に束縛されない超小型光回路を実現できます。理論的に知られてはいたが実際に作成するプロセスが見当たらず、好奇心の対象に留まっていたが、数年前我々の研究室で作製法を発見しました。基本のプロセス技術、電磁波解析、デバイス応用の三つを等しく伸ばせば将来に大きい発展性があると予感して、大学で努力するだけでなく外部に協力を呼びかけて産官学のグループで研究・開発・実用化を推進しています。これを順調に育て、光技術を円熟期を脱して青年に帰らせる一助とすべく、楽しみながら努力しています。

その後一九七九年に今の研究室をスタートしました。主として光通信用部品・デバイスの分野に研究テーマをシフトし、職員、学生諸氏の熱心な研究のおかげで多くの成果、例えばラミポール(偏光子)、TEC(コパ熱拡散大ファイバ)などを世に送ってきました。無形の成果としてはハイブリッド集積などの技術、有形のものは部品デバイスですが、どちらも通信システムのいたるところに入り込んでいます。その間に今まで二〇〇人の卒業生を出し、一九九六年秋初めての同窓会を開きました。同窓生約一三〇人は産官学の各界、通信・エレクトロニクス・ファイバ事業などで活躍しています。中国、韓国、インド、インドネシア、ペルー、シンガポール、ブラジルからの留学生を迎え、皆故国で、または日本や米国で活躍しています。



光ファイバという言葉は今では新聞に毎日出ています。光ファイバ通信技術の誕生前から、大発展、さらに成熟が間近になるまでのサイクルをまのあたりにしました。技術の進展も、陳腐化も、まことに急速です。

### 工学部オープンキャンパス

今年度で三回目を迎えた工学部オープンキャンパスは、平成十年七月三十日(木)、三十一日(金)の両日、「未来の創造」を統一テーマに、機械・知能系、電子・応物・情報系、化学・バイオ系、マテリアル・開発系、人間・環境系の五つの系(全十七学科)をあけて行われた。

両日ともあいにくの小雨模様であったが、遠くは北海道や中国地方からなど、全国各地から、昨年を上回る二、一〇〇名を超える方々がキャンパスを訪れた。

また、三十一日には東北通産局の協力を得て、産学交流セミナーが併せて開催され、約一三〇名が参加し、「東北大学に期待するものは何か」との観点から討論が繰り広げられた。

オープンキャンパスには、市民の方々はもちろんのこと、特に高校生、中学生たちに、最先端の研究に取り組む東北大学工学部の姿を直接みてもらい、工学に興味を持ってほしいという願いが込められている。

電子・応物・情報系では、「二十一世紀を拓く情報エレクトロニクス」をテーマに、電気情報系館及び応用物理学学科館の二会場で公開を行った。

公開は、全研究室の公開内容を一室にまとめた「総合パネル展示」、実際に触れたり体験できる「公開実験・体験コーナー」、研究室毎に工夫を凝らした「研究室公開」の三本立てで構成され、来客数は一、二〇〇名を越え、盛会のうちに終了した。

平成十一年度の工学部オープンキャンパスは七月二十九日(木)、三十日(金)に開催される予定である。

(松木 英敏 記)

### 電気通信研究所一般公開

本学附置の全ての研究所及び研究センターが片平地区において平成十年十月三十一日「片平祭り」として初めて一斉に一般公開されました。電気通信研究所も「片平祭り」に参加し電気系七十五周年記念が開催された一九九四年の一般公開以来四年ぶりに一般公開を行いました。

本研究所の今回の公開の特徴は次のように言えると思います。一、米山先生及び曾根先生の市民向け講演会、米山先生が電波の本質からアンテナの原理まで及び曾根先生が補聴器をはじめとする音響技術を平易に最先端まで短時間に講演いただき大変好評でした。二、八木・宇田アンテナ及び岡部マグネトロンの実演、八木・宇田アンテナの実演は実際に金属の棒の位置を見学者が動かすことにより受信出力が変化することをメーターで読むことが出来、発明の趣旨を体感できる工夫をしました。岡部マグネトロンの実演ではすこぶる古い大きな電気磁石を用いて発振が確認できるようにしており、両実演共大変好評でした。三、各研究室、セン

ター及び工場の公開、今回の公開は分かり易くがモットーで前回の公開に比べて一般市民が理解出来るように各研究室で工夫し、工場では市民にメダルを作成して配る等大変好評でした。今回通研への来訪者が一〇〇〇人を越え大半が小学生からお年寄りの各層に及び予想を超える好評裡に終わりました。本公開は毎年開催されることになっております。同窓会会員の皆様にも多数ご参加頂き、ご批判などを頂戴できれば幸いに存じます。

(舛岡富雄 記)

### 研究室紹介

内田研究室は平成元年五月に発足し、画像電子工学に関する研究を担っています。現在、主として液晶の基礎物性の解明から、ディスプレイや光エレクトロニクスデバイスへの応用に関して研究を進めています。

液晶をディスプレイに適用する場合、液晶分子を均一に配向させることが必要です。当研究室では液晶分子の配向の程度を再現性良く測定する方法を開発すると共に、液晶と基板表面の分子間相互作用が、液晶の配向に支配的役割を演じていることを明らかにしました。また、最近では液晶分子の配向秩序度をバルクから基板表面付近まで連続的に測定する方法を開発し、表面付近では著しく秩序度が低くなっていること、および表面処理の強さが液晶の表面秩序度や表面配向の強さを支配していることなどを明らかにしています。

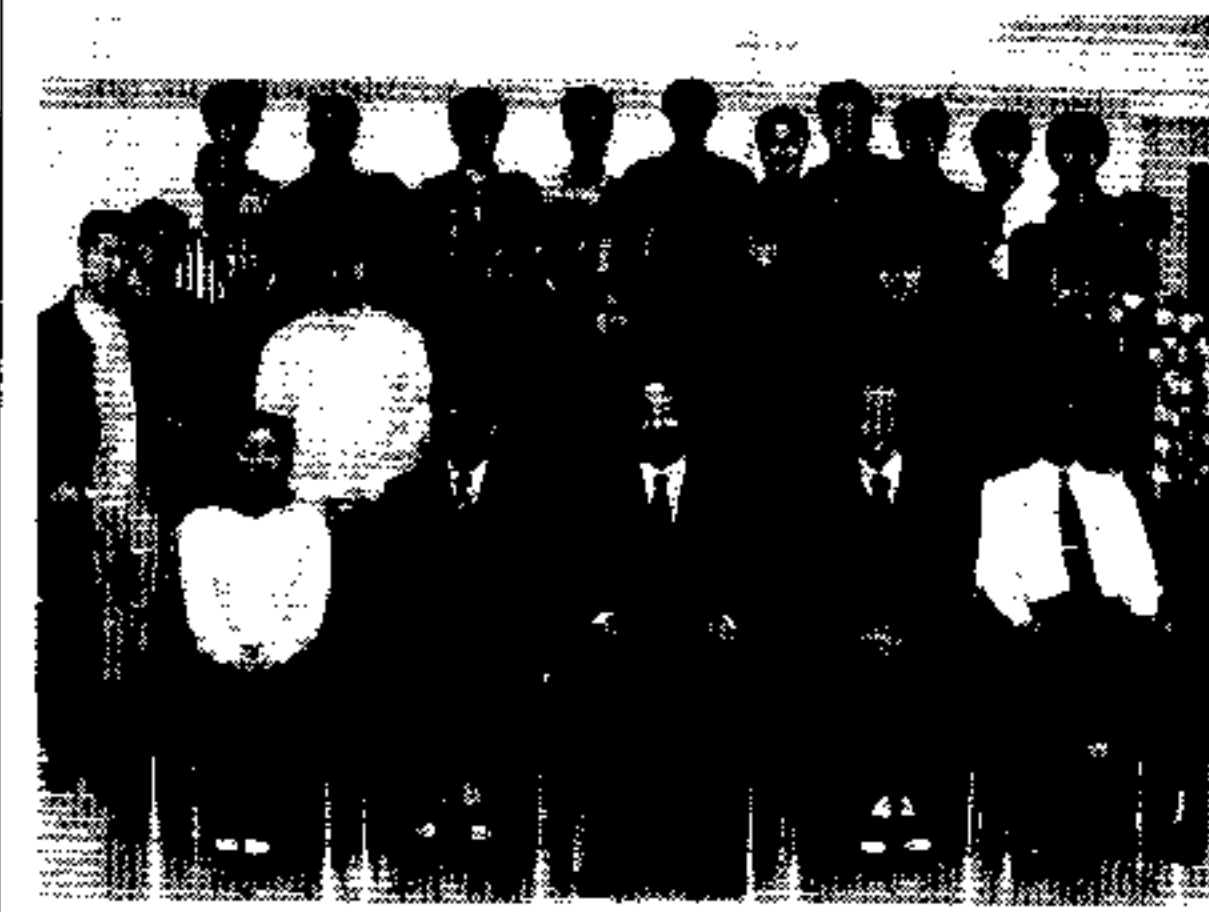
一方、早くからフルカラー化の可否が液晶ディスプレイの将来を征すると予測し、液晶セルの中の各画素に赤、青、緑のマイクログラフィーを付ける方法を考案しました。また、これが液晶のカラー化には最も適していることを明らかにしました。これによって液晶は早い時期にカラー化を達成し、現在この方式がほとんどすべての直視型カラー液晶ディスプレイに使われています。さらに、最近、高速応答性を持つ液晶ディスプレイを開発し、赤、青、緑の画像の時分割表示方式によって、マイクログラフィー無しでフルカラーを表示する新しい方式を提案しました。

また、十数年前から、究極のディスプレイとして、バックライトのいらぬ紙のような反射型のカラー液晶ディスプレイの実現に挑戦しています。反射板のマイクロな表面形状の設計や位相差フィルムの設計、分子配向の制御などを検討した結果、紙とほぼ同様な明るさと質感のある反射型カラーディスプレイを実現することができました。これにより、超低電力の携帯情報端末や、目に優しい高品位のモニターディスプレイが実現されるものと期待しています。最近では、大型から超小型までのディスプレイの実現に向けて多方面から研究を展開

### 工学研究科 電子工学専攻

### 内田研究室

生、研究生、学部学生が張り切っています。



しています。他方、光の透過、遮断のスイッチングを液晶に行わせた光コンピュータの研究も行っています。光の超並列性を利用することによって、画像のような大容量の情報処理が高速に行える可能性が有ります。また、この考え方を半導体デバイスに応用したスマートピクセルの研究も行っており、新しいディスプレイが実現される可能性が出てきています。このように、エレクトロニクスと光の機能を協調させた新しい用途、方式もターゲットにおいて多岐にわたります。やシステムの研究を行っており、宮下助教、川上助手、鈴木技官をはじめとして多くの大学院





会員の皆様にはますますご健勝で活躍のことと存じます。電気・情報系学科の最近の状況を人事異動などを含めてご紹介させていただきます。

昨年三月には、電気、通信、電子、情報工学科から二四七名の学部学生が卒業し、また、大学院工学研究科および情報科学研究科から、前期課程一五七名、後期課程五七名が修了致しました。四月には新たに学部学生(二年次)二五九名(編入学者十一名を含む)、大学院前期課程一九六名および後期課程六二名の新生を迎えました。この中には社会人大学院学生(後期課程)十七名が含まれております。以上のほか、十月に前期課程二名、後期課程五名の新生(十月入学)が加わりました。

次に、人事異動関係についてご紹介致します。昨年三月に豊田淳一教授が停年によりご退官され、名誉教授の称号を授けられました。先生は電力システム工学の分野で輝かしい業績を挙げられ、本系の発展に多大な貢献をされました。ご退官後も八戸工業大学教授として引き続き教育研究に情熱を燃やしておられます。先生の長年にわたるご尽力に深く感謝申し上げますとともに、益々のご健勝とご活躍をお祈り申し上げます。

平成六年以来二期にわたり情報科学研究科長として情報科学研究科の発展に尽力された樋口龍雄教授が昨年三月で任期満了となりました。先生は情報処理教育センター長として引き続きその運営に力を発揮しておられます。また、平成八年から評議員を務めてこられた星宮望教授も昨年三月で任期満了となり、五月からは新たに大学教育研究センター長に就任されました。四月には、根元義章教授が大型計算機センター長に就任されました。三先生の運営手腕に大きな期待が寄せられております。

昨年四月に本学に未来科学技術共同研究センターが新設されたことに伴って、電子工学科の大見忠弘教授が同研究センターに配置換えになりました。先生には引き続き電子工学科

の兼務をお願いしております。なお、本系のほぼ全教授が同研究センターの兼務教育に就いており、側面から支援する体制を取っております。

この他、昨年二月には電気工学科の松木英敏助教が教授に昇任され、生体電磁工学分野を担当されることになりました。また、三月には電子工学科の宮下哲哉助手が画像電子工学分野の助教に、十二月には情報工学科の瀧本英二助手が計算理論分野の助教にそれぞれ昇任されました。新進気鋭の先生方のご活躍が大いに期待されるところであります。なお、電気工学科先端電力工学(東北電力)寄附講座の島本進教授(客員)が、本年一月一日付で電力システム工学講座応用電力工学分野を担当されることになりました。

一方、転出された先生方もおられます。昨年三月末には、通信工学科の木幡稔助教が千葉工業大学に転出され教授に昇任されました。また、七月末には電子工学科のGeorg Stoyanov助教がブルガリアのソフィア工科大学にお戻りになりました。本系の研究・教育にご尽力頂いた両先生に心から感謝申し上げますとともに、今後の益々のご活躍をお祈り致します。

以上の異動により、一月一日現在で電気・情報系学科の教授、助教、講師の運用現員は以下の通りです。

- 工学研究科電気・通信工学専攻および電子工学専攻
- (電気工学科)
  - 教授：一ノ倉 理(学科長)、佐藤徳芳、大竹正明、櫛引淳一、松木英敏、阿部健一、島本 進
  - 助教授：大沼俊朗、安藤 晃、金井 浩、飯塚 哲、斎藤浩海、松浦祐司、郭海蛟、竹内伸直、吉澤 誠、阿部紘士(客員)、古原郁夫(客員)
- (通信工学科)
  - 教授：中村信良(学科長)、阿首弘具、澤谷邦男、宮城光信、清水孝一(併任)
  - 助教授：馬場一隆、山田 顕、中野眞一、講師：田中治雄(電子工学科)

- 教授：川又政征(学科長)、高橋 研、島山力三、内田龍男、塩川孝泰、星 宮 望、大見忠弘(兼務)、吉野勝美(併任)、柴田 直(併任)
- 助教授：荏司弘樹、宮下哲哉、花泉 修、一見亮弘、小谷光司(併任)

- 情報科学研究科情報基礎科学専攻および情報システム科学専攻
- (情報工学科)
  - 教授：堀口 剛(学科長)、海老沢丕道、丸岡 章、亀山充隆、伊藤貴康、西関隆夫、樋口龍雄、根元義章、山本光璋

- 助教授：福井芳彦、瀧本英二、羽生貴弘、青木孝文、鈴木光政、加藤 寧、中尾光之、講師：阿部光衛、藤木澄義、周 曉
- 電気・情報系運営委員会の運営委員長は樋口龍雄教授が、運営委員は四学科長が務めております。また、各学科長がそれぞれ所属する専攻の主任を兼ね、かわりに学生の就職関係および大学院入試関係の職務を切り離して、別に設けた進路指導委員会ならびに入試委員会が担当する体制をとっております。

電気・情報系では、応用物理学専攻と共同で新棟建設の概算要求をしておりますが、このたび第三次補正予算に盛り込まれることが決まりました。建坪は現在の本館とはほぼ同じで、地下一階、地上五階、総床面積約六、七〇〇㎡になる予定です。春頃には着工になると思います。

最後になりましたが、会員の皆様の益々のご健勝とご発展をお祈り申し上げます。(中村信良 記)



会員の皆様にはますますお元気で活躍のこととお慶び申し上げます。電気通信研究所の近況をご紹介させていただきます。

平成十年十二月一日現在、電気通信研究所は、澤田康次所長はじめ、教職員二三名(うち

教授二十一名、客員教授二名、助教十九名、客員助教一名、助手三十九名、外国人研究員二名、〇〇円非常勤研究員五名、技官十九名、〇〇円研究支援推進員七名、リサーチアシリエイト一名、事務官十六名、日本学術振興会特別研究員二名、受託研究員二十八名、内地研修員七名、研究生八名(うち外国人三名)、大学院生一九八名(うち外国人二十名)、学部学生七十三名(うち外国人二名)の総勢四五〇名を擁しています。

前回の報告(平成九年十二月一日)以降の人事異動をお知らせいたします。平成十年一月にコンピュータインテグレーション情報理論研究分野の小澤賢司助手が助教に昇任され、四月に山梨大学工学部に転任されました。三月には、分子電子工学分野のレネー・フランシー教授が任期満了でドイツに帰国されました。また、四月には山下務教授が東北大学未来科学技術共同研究センターへ配置換えとなり、それに伴い超伝導コンピュータインテグレーション研究分野を兼務担当されることとなりました。また、庭野道夫助教が教授に昇任され、電子量子デバイス工学研究分野を担当されております。六月に中国科学技術大学の徐善篤教授をフォノンデバイス工学研究分野の客員教授としてお迎えしております。七月には、超伝導コンピュータインテグレーション研究分野の陳健助手が助教に昇任されました。

以上の移動により、十一月一日現在の各研究分野の専任教授、助教、講師は次の通りです。ブレインコンピュータインテグレーション：コンピュータインテグレーション情報理論(曾根敏夫教授)、情報通信システム研究分野(白鳥則郎教授、木下哲男助教)、情報記録システム研究分野(中村慶久教授)、音響情報システム研究分野(鈴木陽一助教)、生体コンピュータインテグレーション(矢野雅文教授)、ソレイションコンピュータシステム研究分野(澤田康次教授、佐野雅也助教)、超伝導コンピュータインテグレーション(中島健介助教、陳健助教)

物性機能デバイス研究部門：固体電子工学研究分野(外岡富士雄教授、遠藤哲朗助教)、分子電子工学研究分野(末光眞希助教)、スピントロニクス研究分野(荒井賢一教授、山口正洋助教、井上光輝助教)、



プラズマ電子工学研究分野(山之内和彦教授、蝦名敦子助教授)、情報記録デバイス工学研究分野(杉田恒教授、村岡裕助教授)、光電変換デバイス工学研究分野(潮田資勝教授、上原洋一助教授)、電子量子デバイス工学研究分野(庭野道夫教授)

コヒーレントウェーブ工学研究部門:電磁波伝送工学研究分野(米山務教授、中條渉助教授)、極限機能デバイス研究分野(横尾邦義教授、三村秀典助教授)、テラヘルツ工学研究分野(水野皓司教授、ベイジョンソク助教授)、応用量子光学研究分野(伊藤弘昌教授、谷内哲夫助教授)、光集積工学研究分野(川上彰二郎教授)、フオノンデバイス工学研究分野(徐善篤教授、長康雄助教授)、電子音響集積工学研究分野(坪内和夫教授、益一哉助教授)

超高密度・高速知能システム実験施設(施設長・水野皓司教授)、原子制御プロセス部(室田淳一教授、松浦孝助教授)、超高速電子デバイス部(大野英男教授)、知能集積システム部(中島康治教授)

本研究は、平成六年六月に共同利用研究所として改組し、全国で唯一の情報通信に関する国立大学附置研究所となりました。組織としては、先に示しました三大研究部門と超高密度・高速知能システム実験施設の他に、評価・分析センター、スピニクス研究センター、コヒーレントデバイス研究センター、やわらかい情報システム研究センター及び付属工場から構成され、各部門には一客員分野をそれぞれ有しています。共同利用研究所として、全国の国公私立大学や民間企業の研究者との共同プロジェクト研究の公募を行い、七件の研究所外部からの提案を含む計二十二件が採択され、現在研究が進められています。

本研究では、高度情報化社会実現のため、誰でも優しく使える柔軟で知的なヒューマンインターフェース、多量のデータを伝達できる超高密度・高速の伝送網、超高速・超小型トランジスタ等で構成される高速・高機能な通信装置システムなど、ソフト及びハードの両面から次世代技術の開発に向けた研究を精力的に進めております。これらの研究成果を広く世界に知らせ、かつ国内外の優れた研究者との交流の拠点となるべく、平成八年度より通研国際シンポジウムを毎年開催してお

ります。今年初めて、片平地区にある東北大学附置研究所群の一般公開(「片平祭り」)が十月三十一日に行われました。通研では、小学生から一般社会人に至る広範な人たちに、最先端の研究成果を理解し興味を持っていただくため、展示と説明だけでなく、発明時に用いられたマグネトロン及び八木宇田アンテナを再現し、その動作デモを行いました。その結果、当初予想を遙かに越える一、〇〇〇名以上の見学者を迎える事ができました。この「片平祭り」は、今後毎年開催される予定です。

今後も、諸先輩の輝かしい研究成果を引き継ぎつつ、最先端の研究課題に取り組み、新しい科学・技術の創造と発展、そして後進の育成に貢献できるよう所員一同邁進して参る所存であります。同窓会の皆様には、これまでと変わらぬご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。なお、本研究所の最新情報は、インターネット上のホームページ <http://www.riec.tohoku.ac.jp/> で公開しております。

最後になりましたが、会員の皆様のご健康とご発展をお祈り申し上げます。

(山之内和彦・表 鐘石 記)

### 駅伝大会の近況

今回で三十四回目となる、青葉山電気情報系と電気通信研究所との合同による、駅伝大会が平成十年十一月七日(土)に開催されました。当日は天候にも恵まれ、絶好の駅伝日和となりました。走者にとっては「つらい思いをしたものの、走り終わった後のそう快さは印象深かった」など、その思い出は一生忘れられない素晴らしい大会になったのではないかと思います。

ほとんどすべての研究室から一チーム以上が参加し、合計七十六チーム(うち青葉山四十九チーム、通研二十七チーム)が、例年と同様のコースである、青葉山・青葉台・川内にまたがる十区間で競い合いました。どのチームもよく健闘され、特に上位チームはかなりの好タイムを記録しました。上位入賞チームは以下の通りです。

- 優勝 通研 伊藤(弘)研 (51秒50)
- 二位 青葉山 橋引研 (53秒13)
- 三位 通研 横尾研 (53秒32)
- 四位 青葉山 樋口研 (53秒57)
- 五位 青葉山 澤谷研 (53秒59)
- 六位 青葉山 亀山研 (54秒09)
- 七位 青葉山 根元研 (55秒08)
- 八位 青葉山 阿曾研 (55秒18)
- 九位 青葉山 川又研 (55秒29)
- 十位 青葉山 一ノ倉・松木研 (55秒49)

終了後、表彰式において、十位以内の上位チーム表彰はもとより、ブリービー賞、ラッキー賞、特別賞(普通コースを走った、女性および四十歳以上の男性が対象)などの多くの受賞者に盛大な拍手が贈られました。この伝統ある駅伝大会が事故もなく盛況のうちに終了したことに對し、大会実行委員や審判委員を始めとする関係各位に厚く御礼申し上げます。

(電気情報系親睦会委員長 亀山充隆記)

### 39 電気青葉会報告

第七回39電気青葉会が、去る十月二十四日(土)と二十五日(日)の両日にNTT熱海保養所一碧荘において行われた。

39電気青葉会とは、昭和三十九年三月に電気工学科を卒業した同期会の名称である。本会合は、平成二年に第一回が開催され、第二回に当たる平成五年以後は、幹事持ち回りで毎年開催することになっている。

卒業時には六十名であったメンバーは、残念ながら三名が死亡し現在五十七名であるが、その内四十七名に当たる二十七名と多くの方々が今回参加された。まず、総会においてこの一年間全員が無事であったこと、都合により参加できなかった方々の近況が報告され、引き続き会場を別の部屋に移して懇親会となった。

懇親会では、「健康のこと」、「子供(娘)のこと」、「はた又「孫のこと」等を話題として、二次会をも含めて夜遅くまで話の花が咲き、中には卒業以来三十四年ぶりに会った仲間もおり、旧交を温め合うことができた。

### 「エレクトロニクス発展のあゆみ調査会」報告 XI

事務局長 斎藤 雄一

当会の事業に関する十二回目の報告です。当会発足当初から計画されておりました、エレクトロニクス発展のあゆみを記録した著書の最終稿が九十七年末に完成し、九十八年一月二十日付で、「エレクトロニクス発展のあゆみ」・黎明期の東北帝国大学工学部電気工学科のタイトルで東海大学出版会から発行されました。

内容は、東北大学工学部創立(一九一九一〇年)の頃から昭和十年あたりまでを中心とした、エレクトロニクス発展のあゆみをたどることを主なテーマとしております。当会の調査対象は東北大学に限定しているわけではありませんが、この時期に仙台の地に創設された東北大学電気工学科で展開された研究活動が、その後の我が国のエレクトロニクス発展に大きな影響を与えている事実に着目し、これに関する記録をまとめることが当会としてまず実行すべきテーマであるとの考えから、上記のような内容になりました。

現在までに当会の活動にご協力いただいた企業や、個人の方々には本書を寄贈させていただいておりますが、まだご覧になっていない方で御希望の方は、書店を通じて東海大学出版会へ申し込んで下さるようお願いいたします。値段は五、二五〇円(税込み)です。

ここ数年の報告で申し上げておりました電気学会における科学技術史の研究活動に加え、最近では新しい学会の発足などがあって、経済学等さらに広い分野において技術史を専攻する研究者を加えます。今回の出版も、これらの研究活動の一端を担うものと考えております。

調査会連絡場所

〒〇四 東京都銀座七一九一〇 銀七ビル  
(株)グローバルエース内  
電話: (〇三)二五七一一四八三三  
FAX: (〇三)二五七一一四八三三  
E-mail: yuchis@bhe.ocn.ne.jp



翌日は、前日と打って変ったの晴天に恵まれゴルフに行く仲間、箱根遊覧に向かう仲間、また仕事のために朝早く帰らなければならぬ者等、再会を約束しつつ保養所を後にした。卒業三十五年に当たる来年度の第八回39電気青葉会は、仙台周辺にて盛大に開催する予定となっている。

(第七回幹事 伊藤(敦)・若菜 記)

## 支部便り

### 支部長 廣川 勇 司

平成十年の青葉工業会本部総会が札幌市で開催されることになり、北海道支部と合同で総会を開催しました。本部より四ッ柳隆夫会長をお迎えして、平成十年六月五日(金)札幌市中央区南四条西五丁目札幌東急インで行いました。最初に本部理事会が行われ、続いて合同総会が開催され形通り議事が終了しました。記念講演会は「大競争時代に於ける工学の役割」と題して、四ッ柳会長のお話を拝聴することができました。また懇親会では、一年に一度この会に出席することが楽しみという方もおられて大変楽しいひとときを過ごしました。

秋の平成十年度東北大学北海道同窓会連合総会は、平成十年十一月二十七日(金)札幌市東急インで開催されました。これは全学部出身の北海道内在住の同窓生が一堂に会するもので、全道各地から約一二〇名が参加しました。本部から来賓として東北大学総長阿部博之先生をお迎えいたしました。地方で開催される同窓会に東北大学総長が出席されるのはあまり例がなく、本部の北海道支部に対する思慕が感じられます。特に阿部先生は、英出国張の帰路成田から札幌入りされたとの事で、本当にお疲れとは思いましたが、深く感謝しています。そして記念講演として「大学

改革とその周辺」という演題で、一時間に亘り、大学院重点化施策、特許の積極的な取得、産・学・官の協同等について非常に解り易くお話されました。懇談会では札幌以外の各支部の近況報告や、勤務先のPRをする人が居たり、歌ありスピーチありの賑やかな会を持つことが出来ました。

平成十年は北海道にとって、本当に多難の年であったと思います。地方の時代といわれども、北海道拓殖銀行の破綻に始まり、札幌テルメ等の拓銀関連企業も倒産が相次ぎ、さらに日刊紙発行の北海タイムズ社が倒産に至る等の惨憺たる状態にあります。唯一残された希望は十二月二十日就航予定の道民の翼、エア・ドゥだけになりました。平成十一年がよい年であるように全員で頑張りたいと思います。

### 支部長 曾 根 敏 夫

平成九年度東北支部総会は、三月六日に三十六名の出席者を得て、仙台ガーデンパレスで開催され、松本支部長の挨拶の後、議事にはいり、支部事業報告並びに会計報告が承認されました。続いて、平成十年度の支部役員として、支部長に曾根(通研)教授、幹事に中尾光之(情報科学研究科)、山口正洋(通研)各助教教授を選出した後、平成十年度事業計画および予算案が承認されました。

懇親会には、佐藤同窓会長、城戸副会長、原島東京支部長、また岩崎、竹田、宮木、中鉢各名普教授らが出席され、懇談とスピーチに楽しいひとときを過ごしました。特に、岩崎先生が、現代に通ずることばとして、「五省」(至誠ニ侍ルナカリシカ、言行ニ恥ツルナカリシカ、氣力ニ欠クルナカリシカ、努力ニ怠ミナカリシカ、不精ニ且ルナカリシカ)を日々の反省のことばとして思い出しておられるというお話は印象的でした。

三月二十五日には、東北大学の学位記授与式の後、電気系大講義室において、卒業祝賀会と併せて同窓会新入会員歓迎会を開催し、

学部卒業生および大学院修了生の入会を歓迎しました。祝賀会では、電気系学科長・専攻主任を代表して大見教授、続いて通研の澤田所長からご祝辞をいただき、支部長の発声による乾杯で卒業を祝いました。引続き佐藤同窓会長から同窓会入会歓迎と巣立つ後輩への励ましのことばが贈られ、学部卒業生及び大学院修了生の代表から、それぞれ学生生活の思い出やこれからの抱負を含む答辞があり、最後に阿部健一教授の方歳三唱で新入会員の門出を祝いました。

九月には高野知彦先生がお亡くなりになりました。本同窓会便りの前身である「支部たより」は、高野先生が支部長で曾根が支部幹事の昭和四十五年二月に第一号を発行しましたが、その編集に当って、高野先生に「支部たより」の題字を揮毫していただき、以後、「同窓会便り」に改称されるまでの八年間、これが使われました。先生のご冥福を心からお祈りいたします。

### 支部長 吉 田 章

東京支部では、今年度も例年通り「産官学フォーラム」、「企業間ネットワーク」及び本部と共催の「総会」の三行事を開催しました。平成十年二月六日(金)に「第九回産官学フォーラム」が仙台ホテルで開催されました。今回のテーマは、「二十一世紀に向けた産学協同のあり方」とし、産：六十五名(東京支部二十一社、東北支部二社)、官：一名、学：三十八名、同窓会関連：十四名、合計一八名のご出席を頂きました。はじめに岩崎名普教授から「戦略研究について」と題して特別講演を頂き、引き続き官界から郵政省通信総合研究所の大森信吾横須賀センター長、産業界からは私、大学からは沢田康次電気通信研究所所長、川上彰二郎教授が夫々講演を行いました。また学生の就職状況については、大見忠弘教授からご説明を頂きました。

六月五日(金)には、「第七回企業間ネットワーク交流会」が東京五反田「ゆうばおと」

で開催されました。講師は野村総合研究所の岸本隆正主任研究員にお願いし、「二十一世紀に向けたエレクトロニクス産業」と題してご講演を頂きました。当日は各社行事と重なり、二十五名の出席者となりましたが、二十一世紀の将来展望に大いに盛り上がりました。

九月十一日(金)には、「総会」が恒例の東京神田「学士会館」で、本部と共催で開催されました。先生方二十名、一般八十一名、合計一〇一名のご出席を頂きました。

恒例の特別講演は、最近話題になっている環境問題の専門家である福島哲郎氏(株)日本環境認証機構・専務取締役)から「最新環境情報について」と題して、地球の未来に関わる大変興味深いお話を伺いました。総会後、懇親会が開催され、旧交を温めました。本総会において東京支部の平成十一年度新役員として支部長に内田喜之氏、副支部長に奥原弘夫氏、幹事に大沼 崇氏、副幹事に東海林和弘氏が選任されました。

新役員による平成十一年度同窓会東京支部活動へのご支援をよろしくお願い致します。

### 支部長 藤 井 郁 雄

東海支部では、毎年恒例となっている「東北大電気系同窓会東海支部 第二十二回総会」を、去る七月二十四日浜松駅前前の浜松名鉄ホテルにおいて盛大におこなわれました。仙台からはご来賓として、樋口龍雄先生をお迎えし、雨模様にも拘わらず、六十三名の会員が出席いたしました。

総会に先立ち、「Beyond Binary Computing」の演題で、樋口先生にご講演をしていただき、学問の楽しさを味わうことができました。難しいことも、わかりやすく、夢を与える内容で、「学問は楽問」とおっしゃっているように聞こえる程でした。

引き続き総会は、幹事会社のヤマハ(株)香高孝之氏(電子四十三年)の司会で進行し、ヤマハ(株)の星 十郎氏(通信三十六年)の開会の辞、中部精機(株)の藤井郁雄氏(電

氣三十二年)の支部長挨拶と続き、名古屋商科大学教授本田波雄先生(通信十九年)の「私は万年乾杯役だ」というユーモア溢れる乾杯の音頭で祝宴に移りました。

樋口先生からは同窓会本部の近況、教養部の無い時代の学生事情など面白く話していた。教養部という言葉に川内のオンボロ校舎を思い出して、懐かしい思いがしました。

この後、眞野研究開発技術センターの眞野同夫先生(電気九年)が、ユーモアで会場を沸かせた後、各大学、企業を代表して近況の報告をして頂きました。あちこちで談話の渦ができて、楽しんだ後、三菱電機メカトロニクスソフトウェア(株)の石川政雄氏(電気四十七年)を次回幹事として紹介し、次回の盛會を誓いあげました。終わりに全員で「青葉もゆる」を合唱し、中部日本放送(株)松倉英樹氏(電気三十八年)の閉会の辞、山田 泰先生(電気二十三年)の方歳三唱で会を締めくくりました。

最後に、母校及び本部の発展と会員の皆様のご健勝をお祈り申し上げますと共に、一層のご指導をお願いする次第です。

### 近況報告

#### 戸田彰彦

ヤマハ(株)・平成二年電通修了



私は平成二年に川上研究室で修士課程を修了後、ヤマハ株式会社に入社し、半導体LSIの開発・設計部門に配属されました。LSIと言え

ば、その中心となるのはデジタル回路ですが、私が入社以来取り組んでいるのはアナログ回路です。そもそもLSIは、従来アナログ回路でやってきた機能を、デジタル回路に置き換えることによって発展してきたものであ

#### 泉高明

北海道電力業務高度化推進室 昭和五十二年通信卒



電力会社に就職してから二十年が過ぎました。ここ五年程は情報部門の仕事を担当していますが、コンピュータやインターネットなどの情報技術に関して米

が優位に立っているのは周知の事実です。

今年の夏、リゾートレッシュ休暇を利用して家族とヨーロッパ旅行を楽しんできました。若い時の出張以来十二年振りにフランスを訪れたのですが、一人の旅行者の目から見て、昔も今も変わらず感心したのは、他人への「Pardon」などの言葉や謙合いによって公衆でのマナーが維持されていることでした。

様々な人種を包含した複合的な社会では、自己主張やコミュニケーションのスタイルの確立により、全体の調和が保たれているためでしょう。一方、日本は現場主義に立脚し、個人が状況に柔軟に対応できる組織力が良い点だと思えます。

日本経済は今非常に厳しい状況にありますが、「米国に見習え」といった論調が昔程でないのは適切であり、日本には日本の社会に適したやり方があると考える今日この頃です。

#### 小林明夫

三洋電気 昭和四十四年通信卒



私は昭和四十四年に柴山研究室を卒業し三洋電機に入社し、学生時代の研究とは全く異なる分野の電子回路設計を経て、欧州駐在を経験し、帰国後AV商品の

商品企画、その後本社技術戦略室勤務となり、今は半導体に勤務しております。現在の仕事は、主に中長期計画の策定と本部全体の技術開発に横串を差す事ですが、ご存知の様に九十六年年初のDRAM価格の急落に端を発した半導体不況は今も回復の兆しは見えず、価格も日々下落という状況で、従来計画の見直しと新たな指標となるべき計画策定に苦慮しているのが現状です。当社は幸いにもDRAM比率は低かった為、当初の打撃は少なかつた物の、今後は勝負と云うことになり、大手も苦しんでいる所ですが、我々も頑張っている所だと思えます。ここ三、四年、リクローターとして又電気系同窓会活動を通じて多くの東北卒業生や先生方が活躍されるのを目にし、又お会いできる機会が多く大変嬉しい限りです。同窓会の皆様の益々のご活躍をお祈り申し上げます。

### 叙勲

左記の方々叙勲をお喜び申し上げます。

- 桂 重俊 勲三等旭日中綬章 (平成十年四月、通十九)
- 大和 淳二 勲三等瑞宝章 (同、電二十二)
- 大竹 利男 勲三等瑞宝章 (同、電二十六)
- 近野 正 勲二等瑞宝章
- (平成十年十一月、電二十一)
- 石田 哲郎 勲二等旭日中綬章 (同、電二十一)
- 須藤 二全 勲二等旭日中綬章 (同、電二十一)
- 重井 芳治 勲三等瑞宝章 (同、電二十三)

### 訃報

左記の方々の御逝去の報を受けました。ご冥福をお祈りいたします。

4月	9月	12月	2月	4月	9月	4月
16日	5日	28日	9日	9日	22日	22日
(電10)	(電10)	(電10)	(電10)	(電10)	(電10)	(電10)
高橋 弘明	佐藤 光雄	興津 英輔	雄山 雅厚	水上 雅厚	岩井 政義	宮崎 政義
佐藤 弘明	佐藤 光雄	興津 英輔	雄山 雅厚	水上 雅厚	岩井 政義	宮崎 政義

### 編集後記

本号も無事編集することができました。お忙しい中御執筆を頂きました方々に、心より御礼申し上げます。

本紙で多く言及されておりますように、大事も大きな変革のうねりの中にあります。このような時代はまた、ありうべき大学の将来像について考える好機でもありましょう。同窓生の方々の対話も大事にしながらあれこれと考えをめぐらせたいものです。なお一層のご支援をお願い申し上げます。(中尾記)

### 「同窓会便り」編集委員会

- 委員長 山之内和彦 (34) (通電)
- 副委員長 阿部健一 (39) (通電)
- 委員 佐藤徳芳 (35) (通電)
- 委員 米山務 (34) (通電)
- 委員 中村傳良 (41) (通電)
- 委員 小林明夫 (44) (通電)
- 委員 山田顯一 (49) (現教)
- 委員 益光之 (56) (現教)
- 委員 中尾正洋 (54) (現教)
- 委員 山口正洋 (54) (現教)

\* 東北大学電気通信研究所  
\*\* 東北大学大学院工学研究所  
\*\*\* 東北大学大学院情報科学研究科  
\*\*\*\* 三洋電気株式会社